



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## Practice and Evaluation of Kindergarten Health Education as Early Exposure Learning for University Students of Yogo Teacher

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹鼻,ゆかり, 神山,雅美, 山田,有希子, 中村,陽子, 八木,亜弥子, 山崎,奈美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00173506">http://hdl.handle.net/2309/00173506</a>

## 養護教諭養成課程における早期体験学習としての 幼稚園での保健教育の実践と評価

竹鼻ゆかり\*<sup>1</sup>・神山 雅美\*<sup>2</sup>・山田有希子\*<sup>3</sup>・中村 陽子\*<sup>3</sup>・八木亜弥子\*<sup>2</sup>・山崎 奈美\*<sup>3</sup>

### 養護教育講座

(2021年8月30日受理)

TAKEHANA, Y., KAMIYAMA, M., YAMADA, Y, NAKAMURA, Y., YAGI, A. and YAMAZAKI, N.: Practice and Evaluation of Kindergarten Health Education as Early Exposure Learning for University Students of *Yogo* Teacher. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 73: 291-299. (2021) ISSN 2434-9399

### Abstract

It is important that university students of *Yogo* teacher learn health education methods. Students must get opportunities to learn about health education during early exposure learning. This study was designed to elucidate the effectiveness of kindergarten health education practice for students' motivation to learn about health education and for the understanding of children during early exposure learning.

Second-grade university students of *Yogo* teacher practiced kindergarten health education. The intention of the practice was that students would become motivated to provide health education and to understand children's growth and development. After the practice, 20 students and graduate students answered a Google form questionnaire about the kindergarten health education practice. Furthermore, four kindergarten teachers answered the questionnaire.

By virtue of the practice, students came to understand children's growth and development and had good experiences of health education. Kindergarten children exhibited interest in health. Results show that health education practice, as early exposure learning, was a great learning resource for university students of *Yogo* teacher.

**Keywords:** kindergarten, health education, method of health education, early exposure

*Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

### 要 旨

養護教諭養成課程の学生にとって、保健教育の方法を学ぶことは重要である。そのため学生たちは、早期体験学習として保健教育を行う機会を得る必要がある。本研究は、学生たちの保健教育を学ぶ意欲を高めること、子ども

---

\* 1 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)  
\* 2 東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎 (112-0002 東京都文京区小石川4-2-1)  
\* 3 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

の理解を促すことを目的とし、早期体験学習として、幼稚園で保健教育を行った実践を評価した。

養護教育専攻の2年生が幼稚園での保健教育を実施した。この実践の目的は、保健教育を行う意欲を高めるためと、子どもの成長発達を理解することである。この実践の自己評価として、在校生ならびに卒業生にグーグルフォームによる調査を行い、20名から回答を得た。また幼稚園教諭4人に自由記述による調査を行い、評価を得た。実践によって、学生たちは、子どもの成長発達が理解できるようになるとともに、保健教育のよい機会を得ることが出来ていた。また幼児たちは、健康に興味を持てるようになっていた。結果として、早期体験学習としての保健教育の実践は、養護教育専攻の学生にとって、多くの学びを得る機会となった。

キーワード：幼稚園，保健教育，保健科教育法，早期体験学習

## 1. はじめに

教員養成大学において養護教諭を志望する学生が、保健科教育法の指導力を習得することは、児童生徒の健康を保持増進する養技教諭になるために重要である。現在養護教諭は、兼務発令により「保健」の教科の領域に係る教諭または講師となり、勤務校において授業を担当できる制度的措置が取られている<sup>1)</sup>。この措置は、1997年の保健体育審議会答申を受けて行われ、養護教諭のもつ専門的な知識や技能を活用し、薬物乱用、いじめ、不登校、性の逸脱行為などの現代的課題に対応するとともに、児童生徒の健やかな心身の発達を支援するために、講じられた措置である<sup>1)</sup>。そこで、多くの大学の養護教諭養成課程では、中学校教諭ならびに高等学校教諭一種免許状（保健）を取得できるようなカリキュラムのもと、保健の授業を積極的に行う養護教諭を養成している。しかし現実には、保健科教育法8単位と教育実習等において、学習指導要領の理解や、指導案の作成、模擬授業の実施等を行うだけでは、学生が授業力を身につけることは難しい。学生のなかには、養護教諭は児童生徒を成績で評価する立場にはならないほうがよいという考えのもと、保健等の授業を行うことに抵抗のある学生もいる。そのため、専門教育の早期の段階で早期体験学習（early exposure）として、学生が児童生徒の前に立ち保健教育を実際に行う機会があれば、授業に対する動機が高まったり、子供の成長発達を理解したりすることが期待できる。

早期体験学習は、1995年当時の文部省が医学教育等の改善・充実と医療技術者の養成を目指すためのカリキュラム改善の試みとして始まった<sup>2)</sup>。この学習は、医学や看護教育において、学生が入学後の早期の段階で、病院等の医療の現場で介護体験実習等の直接的体験を通じて、医師や看護師等を目指す動機付けや使命感を体得させること等を目的としている<sup>2)</sup>。現在まで、医学、薬学、看護学などの医療系大学では、病棟や外

来、介護保険や障害者施設、保健センター、保育所などにおいて早期体験実習が実施され、多くの成果が報告されている<sup>3-7)</sup>。しかし教員養成系大学における学生の早期体験学習、とりわけ養護教諭を志望する学生の保健教育の実施に関する早期体験学習の報告はほとんどない。

そこで本研究の目的は、A大学の養護教育教員養成課程2年次に行った幼稚園での保健教育の実践が、早期体験学習としてその後の学生の保健教育への意欲や子ども理解にどのように影響しているかについて検討することである。

## 2. 保健教育の実践内容

### 2. 1 講義における幼稚園での保健教育の実践の位置づけ

幼稚園での保健教育の実践（以後、授業実践）は、2013年と2014年には、3年次の春学期に開講している選択科目、「保健科教育法Ⅱ」において、また2015年から2021年度現在までは2年次の春学期に開講している選択必修科目、「学校看護学概論」において、幼稚園での保健教育を実施するための準備から当日の指導（以下、当日指導）までを保健教育の実践として、シラバス上に位置づけ実施した。目的としては、学生がより早い段階で、保健教育の実践を行うことで、養護教諭として授業を行う意欲やイメージを持てるようになること、ならびに幼児の成長発達の様子を具体的にイメージできるようになることとした。なお早期体験学習として位置づけるため、2015年度から実施学年を3年次から2年次に移動した。

### 2. 2 科目の目標と内容

現在実施している「学校看護学概論」の目標と15回の内容を説明する。

目標は、学問的主題と学修成果から構成している。学問的主題は、子供の健康課題を解決するために、養

護教諭が行う養護活動過程と、個別の保健指導、保健教育に関する知識と技術を学ぶこととした。また学修成果は、子供の成長発達に応じた健康課題を見極め、ニーズに合った方策を考えられるようになることとした。

授業スケジュール（展開計画）は、養護教諭が子供の心身の健康の保持増進を図るために必要な観察やアセスメントの方法、養護活動の過程、保健指導、保健教育の内容と方法として構成した。なお15回のうち、前半では、必要な観察やアセスメントの方法、養護活動の過程、保健指導を扱い、後半では、保健教育の実践として準備から当日指導までとした。

本論では、後半に行っている保健教育の概要について述べる。

## 2. 3 幼稚園における保健教育の実践の概要

受講生は、養護教育教員養成課程に在籍する学生であり、2013年から2021年まで毎年10名前後であった。

例年、6月初旬から保健教育の準備を始め、7月にA大学附属幼稚園2園舎（以後A園、B園）のクラスごとに保健教育を行った。保健教育の実施当日は、指導教員と学生とが各園舎を訪問し、幼児の降園前の時間に、該当クラスの保育室において10分程度、保健教育の時間を設けて実施した。

実施にあたっては、学生2～4人程度が一つのグループとなり、グループごとに、テーマに応じて事前に作成した紙芝居、ペープサートなどの教具を用いて、担当学年のクラスに対して保健教育を行った。グループ数は例年4～5グループで、保健教育を受ける幼児は、4歳児と5歳児学年、合計4～5クラス（1学級25名～30名）であった。

指導テーマは、時期や幼児の状況を鑑みて、幼稚園の副園長や教諭、養護教諭から提案してもらった。過去に実施したテーマは、熱中症予防、歯磨き、うがい・手洗い、バランスのよい食事、けがの予防、等であった。

## 2. 4 準備から当日までの流れ

### 2. 4. 1 保健教育のイメージづくりと教材研究

例年、5月末から6月初旬に、保健教育の第1回目の講義を行った。

2年次では学習指導案を具体的に学んでいないため、初回には、教員が学習指導案の目的や構成内容を教授した。さらに、学生が幼稚園の幼児の様子や指導のイメージを持つため、過去に学生が幼稚園で行った保健教育のビデオ映像を鑑賞した。また、ビデオ鑑賞後に教員から、幼稚園での教具の作成上の留意点とし

て、指導の際には、ゆっくり大きな声で話すこと、笑顔で明るく対応すること、幼児の発達に応じたわかりやすい言葉を使うこと、教具については、幼稚園では文字の学習は行わないため文字を使わないこと、ペープサートや紙芝居はわかりやすいように大きく鮮明な色と絵で作成すること、ペープサートの表と裏を丁寧に作ることでクルンと変える動かし方ができたり、人形の動きや表情が増やせたりすること、などの基本的な内容を教授した。講義終了時には、教員から学生に、ビデオで観た指導案を配布し、指導内容を理解するよう促した。また、教員が学生を2～4名のグループに分け、指導テーマを各グループに振り分け、指導案の準備をするよう伝えた。

2回目は、実地指導講師として附属小学校の養護教諭に、学校での保健教育の実際を紹介してもらい、学生たちが指導の内容や教具の具体的なイメージを持つようにした。

なお学生たちには、教材の知識を深めるため課題として、担当となったテーマについて教材研究のレポートを各自が行うよう指示し、3回目の指導案検討の当日に提出するよう求めた。

### 2. 4. 2 指導案の作成

3回～4回目は、指導案の作成の時間に充てた。

学生たちには3回目の前までに、グループで指導案を作成してくることを課題とした。授業時間には、教員がグループごとに、指導案を学生に説明させた後、目的と流れを確認し、修正点を指導した。学生は指導に基き、指導案の加筆修正を行った。4回目も同様に、グループごとの指導案の作成と修正の時間とした。

なお学生には、授業時間以外に必ず1回は教員に指導案を見せ、修正するよう指示し、指導を重ねた。さらに学生たちは、指導案が完成した時点から、空き時間を用いて教具の作成にとりかかった。

### 2. 4. 3 準備と練習

5～6回目は当日指導の練習に充てた。

授業時間には、各グループ10分の模擬指導を行い、その後、実施した学生と参観した学生とで意見交換を行った後、教員より講評として、改善点とよくできた点を伝えた。なお、講評の際に教員は、学生たちの意欲を喚起するため、できるだけ良い点を褒めることを意識した。

さらに授業時間だけでは当日の指導までの準備と練習が足りないため、幼稚園での指導の2週間ほど前から、教員と学生たちの空き時間を使い、練習を繰り返

返し行った。この練習のときにも、教員と学生が意見交換をしながら、内容や教具を修正し、より完成度の高い指導となるよう準備して当日を迎えた。

また幼稚園での幼児の様子を理解するため、年によってはB園を1時間程度訪問し、園児の生活を見学する機会を得た。

#### 2. 4. 4 保健教育の当日

例年7月の初旬、指導教員と学生10名ほどが2園舎を訪問し、担当クラスの保育室で10分ほど指導を行った。指導の後には、幼児たちの質問に学生が受け応えをした。その後、副園長、幼稚園教諭、幼稚園養護教諭等から、幼児たちに向け、幼児の実情に応じた追加の説明を行った。

また幼児たちが降園したのち、30分ほどの協議会を設定した。協議会は、学生の振り返りならびに見学した感想や意見の後、副園長、幼稚園教諭、幼稚園養護教諭等から講評をいただいた。

なお、保健教育の実施について保護者には、降園時に担任から説明するかあるいは、養護教諭が保健だよりにて連絡した。

#### 2. 4. 5 評価

授業実践の評価は、指導案ならびに成果、事後のレポートで行った。

### 3. 実践の評価

#### 3. 1 学生たちの学びに向かう姿の変化

2013年から始めた本実践は、積み重ねにより現在では学生たちの保健教育実施の早期体験学習の位置づけとなってきた。受講する学生は、先輩たちから実際に行った保健教育の様子を見聞きしたり初回に過去のビデオ映像を観たりすることで、学生自身が目指すべき目標を知ることができるようになるとともに、保健教育への意欲が高まるきっかけとなった。

また準備として、教材研究のレポートを課題とすることにより、学生たちは、熱中症の予防や歯磨き、手洗いの方法などテーマの基礎基本を学び、準備ができるようになっていった。実地指導講師の講義では、養護教諭が行っている保健教育の指導の様子や、各種工夫を凝らした教具の紹介によって、幼稚園での具体的な指導内容がイメージできるようになった。指導案の作成では、指導教員が学生に授業時間以外の指導案作成の指導を行うことで、学生たちは意欲を持つようになるとともに、指導案作成の必要性と作成のポイント

が理解できるようになっていった。

また、5～6回目の練習時間における学生同士の意見交換では、指導の流れや、言葉の使い方、教具の使い方、より分かりやすい教具にするための工夫点等が出された。さらに、学生たちはグループの模擬指導を見る度に、発言内容が具体的で的を射た内容になっていった。この意見交換は、学生たちがお互いに刺激しあい成長する貴重な学びの機会となった。また学生たちは、幼児に触れる機会がほとんどないため、教具づくりの最初の段階では8頭身の幼児を書いたり、幼児には難しい言葉を用いたりする学生も多くいた。しかし準備を重ねるにつれ学生たちは、幼児の認知レベルを理解できるようになり、幼児にあった教具を作れるようになっていった。

一方、現実には授業時間だけでは練習時間が足りないため、授業時間外で何度も練習を重ねる必要がある。この時間外の練習の際に、教員と見学する学生が適切な助言を与えることによって、学生たちの力量は確実に向上していった。同時に、見学者となった学生の模擬指導を観る観点が育つ有効な機会となった。また練習を重ねるなかで、学生は大きな声を出せるようになったり、活舌がよくなったり、自信をもって指導ができたりするまでに成長した。

当日の指導においては、学生たちは、緊張しながらも練習の成果を発揮し、最高のパフォーマンスで行うことが出来た。また、幼児たちから質問を受ける場面では、学生たちは幼児たちの質問にたじろぎながらも、何とか受け応えをし、満足感を得て授業実践を終えた。

この保健教育の指導の機会により学生たちは、幼児と触れ、自分たちが行った指導に対する幼児の反応を見て、幼児の集団としての成長発達の様子や個人差を実際に知ることが出来た。また学生のなかには、その場で臨機応変に幼児に応じた声の大きさや速さを調整できたり、幼児に受け答えできたりするものもいた。看護学において早期体験学習は、学生にとって看護への関心や対象の理解、自己理解を深める機会となることが示されている<sup>4)</sup>。本実践においても、準備から当日指導までの一連の流れを通じて保健教育の実践を体験するなかで、学生たちは、幼児の成長発達を理解し、教壇に立つことの面白さと責任を学ぶことが可能となった。

つまり、2年次に行っている保健教育の実践は、学生たちにとって早期体験学習の位置づけとなり、今後の保健教育への意欲や目標設定に有効であることが示唆された。

### 3. 2 学生の評価

幼稚園での授業実践が, その後の学習や就職先でどのように役立っているかを検討するため, 2013年から2019年度に履修した学生を対象とし, グーグルフォームによりアンケート調査を行い, 20名(学部生5名, 卒業生15名)から回答を得た。養護教諭経験は, なしが10名(50%), 1年, 3年, 5年が各3名(15%), 6年が1名(5%)であった。

調査内容は, 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点, 全14項目ならびに, 総合評価1項目とし, 回答はすべて4件法とした。さらに, 幼稚園での指導経験が役立ったか否かの理由を自由記述で求めた。

#### 3. 2. 1 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

表1に示すとおり, 15項目すべてにおいて概ね良好な回答が得られた。なかでも「子どもの発達段階に応じた指導の必要性が理解できるようになった」「集団の前に立って教える経験になった」は, 「とても思う」「まあまあ思う」を合わせると100%であった。

一方, 「教室(教壇)で授業をするイメージが持て

るようになった」「授業をやってみたいと思うようになった」「養護教諭になるにあたって, 自分の課題を見出せるようになった」については, 否定的な考えも3割から4割を占めた。

つまり, 子どもの発達段階や, 対象にあった言葉や教具を選ぶ必要性については理解が促されるものの, 授業を行うなどこれから先の事象については, 2年次以後の経験や学習の積み重ねが必要であることが示された。

また総合評価として「大学3年以後もしくは卒業後において, 幼稚園での指導経験が役立ったと思いますか」については8割が「とても思う」「まあまあ思う」と答えていた。

#### 3. 2. 2 自由記述について

表2に示すとおり, 自由記述は類似の記述をまとめカテゴリー化した。その結果, 【早期体験の重要性】【発達段階の理解や, 発達段階に応じた指導の重要性】【保健教育実施の興味関心】【理解しやすい話し方や教具づくりの理解】【その後の学習や実践での活用】【自信の高まり】となった。

とりわけ, 【早期体験の重要性】では, 養護教諭のイメージづくりや早期に学ぶ意義が述べられていた。

表1 受講生の事後アンケート

評価区分	項目	とても思う		まあまあ思う		あまり思わない		ほとんど思わない	
		n	%	n	%	n	%	n	%
知識・技能	幼児期の健康教育の必要性が理解できるようになった	10	50.0	7	35.0	3	15.0	0	0
	子どもの発達段階に応じた指導の必要性が理解できるようになった	18	90.0	2	10.0	0	0	0	0
	子どもの成長発達の段階が理解できるようになった	7	35.0	10	50.0	3	15.0	0	0
	指導案の作成の基礎がわかるようになった	11	55.0	7	35.0	2	10.0	0	0
	仲間と協力して指導案を作成できるようになった	10	50.0	6	30.0	3	15.0	1	5.0
思考・判断・表現	園児が理解しやすい言葉使いができるようになった	3	15.0	15	75.0	2	10.0	0	0
	園児に対する声の大きさが理解できるようになった	6	30.0	9	45.0	5	25.0	0	0
	園児の発達段階に合った教材(熱中症, 歯磨きなど授業のテーマ)を考えられるようになった	6	30.0	11	55.0	2	10.0	1	5.0
	園児がわかりやすい教具(紙芝居・人形・模型など)を考えられるようになった	11	55.0	7	35.0	2	10.0	0	0
主体的に学習に取り組む態度	集団の前に立って教える経験になった	17	85.0	3	15.0	0	0	0	0
	教室(教壇)で授業をするイメージが持てるようになった	7	35.0	7	35.0	6	30.0	0	0
	授業をやってみたいと思うようになった	7	35.0	6	30.0	6	30.0	1	5.0
	教材・教具づくりは楽しいと思うようになった	8	40.0	7	35.0	4	20.0	1	5.0
総合	養護教諭になるにあたって, 自分の課題を見出せるようになった	6	30.0	8	40.0	6	30.0	0	0
	大学3年以後もしくは卒業後において, 幼稚園での指導経験が役立ったと思いますか	11	55.0	5	25.0	4	20.0	0	0

表2 自由記述による学びの成果

早期体験の重要性	「具体的な養護教諭のイメージ像やその後の課題が具体的に掴めるようになった」 「幼児は反応も素直であるし、幼稚園教諭の指示の出し方は大変勉強になる。そういう面で初学者に向いているように感じる」
発達段階の理解や、発達段階に応じた指導の重要性	「子どもの発達段階の理解という意味ではとても参考になった。」 「大学時代において、幼稚園での保健指導以外で幼稚園児に接する機会はなかった。幼児期の子供を理解するには貴重な経験だったと思う」
保健教育実施の興味関心	「実習前は、人前で話すことに苦手意識があり、授業をすることに抵抗があったが、幼児の前で保健指導をすることで「授業をするのは楽しい」という感覚を体験することができた。」
理解しやすい話し方や教具づくりの理解	「子どもの発達段階を考えて教具づくりをすることや言葉づかいを考えることを学ぶことができた。」 「幼稚園でどんな指導を受けているかを考えて、現在関わる子供たちに何が必要か少し考えた」
その後の学習や実践での活用	「その後の教育実習などでも伝え方という視点をもって取り組むことができた。また、教員になって以降も、就学児や入学したばかりの児童への保健指導や健康診断時に、視覚的情報を多めに取り入れようと意識することが増えた。」
自信の高まり	「初めての保健指導を成功させたことで、自信につながった。」

また【発達段階の理解や、発達段階に応じた指導の重要性】では、多くの記述により発達段階が理解できたことが述べられた。【その後の学習や実践での活用】では、幼稚園の指導がきっかけとなり、養護教諭として働いている現在でも保健教育を行っているとの記述もあった。

項目の割合と自由記述からは、本講義の目的である養護教諭として授業を行う意欲やイメージを持てるようになること、ならびに幼児の成長発達の様子を具体的にイメージできるようになることが概ね達成され、早期体験学習として幼稚園での保健教育の意義が示された。その一方で、役立たない理由としては、幼稚園での幼児を対象とした実践が、勤務する中学校では結びつかないという記述も4件あり、幼稚園から高校まで、発達段階を追った指導経験の必要性が示された。

また、学生が早期に幼稚園を訪問し、保健教育を行いながら、幼児の成長発達の現状を理解することにより、学生は、体験学習以前に持っている単に子どもが可愛いという感情から、保健教育の対象としての理解や、人の成長発達に見合った保健教育の在り方を考えることができるようになっていた。

つまり学生は、2年生の段階で、教員として幼児にどのように育てて欲しいかという教育観を得る体験ができ、早期体験学習の意義があるといえる。

### 3.3 幼稚園の副園長ならびに教諭による評価

幼稚園の副園長ならびに教諭、計4名に対して、今まで行ってきた「幼稚園で学生が保健教育を実施したことによる幼児たちの意識や行動の変化」「学生たちの指導に関する要望や意見」について匿名性を保持した自由記述により回答を求めた。自由記述は、同じ内容の記述をカテゴリーとして分類した。代表的なコードとカテゴリーを表3、4に示した。

幼稚園で学生が健康教育を実施したことによる幼児たちの意識や行動の変化については、表3に示すとおり、【実施後の子供の反応や変化の表れ】【幼児の興味をひく教具の使用による効果】【指導内容の家庭における共有】となった。

【実施後の子供の反応や変化の表れ】では、学生の保健教育後、別の機会に幼稚園の教諭が行った指導に幼児が反応することや、幼児の現状に即したテーマを扱うことにより、幼児の関心が高まることが示された。また、このテーマ設定にあたっては、事前に副園長と教員とが相談し、テーマ決定をすることが大事であることもわかった。さらに、学生の指導は拙い部分もあるが、学生が一生懸命に指導している姿は、幼児にも伝わっており、幼児にとってよい学びの機会となっているとの記述もあった。

一方、テーマとして取り上げることの多い手洗い・うがい、歯磨き、バランスのよい食事等は、生活習慣に関わるテーマである。幼児が生活習慣を獲得する意義は、園生活をスムーズに送る、子どもの自立を促す、子どものこれからの社会生活の基盤となるという点で

表3 幼稚園教諭の自由記述による事後評価 幼児たちの意識や行動の変化

<p>実施後の 子供の反応や 変化の表れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼食時に自分のお弁当の中味を確認したり, 掲示の中の食材と比べて確認したりしていた。</li> <li>・発表後, すぐに指導の効果があったわけではないが, ふとした時に, 覚えていることをつぶやく子どもがいたり, 教員も発表を思い出させるように声をかけたりした。</li> <li>・時期や生活に即したテーマでは, 指導を受けたあと, 自分たちの生活の中で気を付けたり, やってみたいすることにつながりやすい。</li> <li>・例えば, 熱中症対策の指導後は, 水分補給の声掛けに進んで水を飲んだり, 日陰で休んだりすることがスムーズになった。</li> <li>・印象に残っているのは, 熱中症に関する指導である。熱中症は, 暑い時期になると家庭や幼稚園で話題にする。その際, 「暑いから帽子をかぶろう」「水(水分)を取ろうね」など, 大人は声をかける。そのような経験がある中での学生さんの発表だったので, 子どもたちは引き込まれていた。ストーリー仕立ての話の中に, 熱中症になる原因や予防が組み込まれており, 子どもたちは知っていることはよくつぶやいていたが, 知らないところはよく聞いていた。</li> </ul>
<p>幼児の興味を ひく教具の 使用による効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パネルシアターといった視覚的教具を使っていたので, 絵といえど, 幼児は表情に意識を向けやすそうであった。</li> <li>・食育の表など学生が作った教具を, 幼児が見えるところに掲示しておいた。この掲示により, 幼児は指導内容を思い出すきっかけになり, 幼児自ら日々の生活の中で楽しんで確認することができた。</li> <li>・視覚的な教具, 特にポイントが分かりやすく書かれているものはより事後指導にも活用できた。</li> </ul>
<p>指導内容の 家庭における 共有</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健指導の内容を学年だよりに掲載したり, 降園時の連絡で保護者に伝えたりすることで, 家庭の食事でも栄養を確認しているという親子もいた。</li> <li>・学生の指導を受けた後, 家庭で教えてもらった内容について, 「～なんだよ」と家族に教えていた, と保護者から聞いた。</li> </ul>

表4 幼稚園教諭の自由記述による事後評価 学生たちの発表に関する要望や意見

<p>発達の連続性の 理解の必要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的なやり方で, 「分かった人～」「はい」と手を挙げさせるやり取りでは, 幼児がどれくらい理解しているか分からない, 動作ややり取りが楽しいだけの場合もある, と伝えたことがあった。これは, ありがちなやり取りであるが, ドラマなどで見る幼稚園の風景にありがちな場面で, このことだけでも実際に幼稚園に来ていただくことに意味がある。</li> <li>・養護教諭志望の学生にとって, 小学校入学の前の子どもたちの生活や育ちの様子を実際に見て理解することはとても意味がある。幼児は, 幼児期にいろいろなことを学んで身に付けている子ども達だということを知ってもらうことは小学校での指導に役立つ。</li> <li>・5歳時の学年の子どもたちにはやり方を伝えるだけでなく, 自分の体の健康のために必要だということを意識できるような指導がいいことを伝えたことがあった。学生たちがとても驚いて受け止めていた記憶がある。発達については事前の学習だけでなく, 指導のあとの振り返りで深めていただけると演習の意義がある。</li> </ul>
<p>幼稚園での 指導機会の 重要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現場に来る機会が多くなると, 発表も発表した後の振り返りも変わってくる。</li> <li>・複数の学生が相談しながら準備したり発表したりすることで, 経験が深まっていくと考えられるので, 継続して欲しい。</li> </ul>
<p>事前から 事後における 学習の必要性</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導内容については幼児の生活に密着した事項がよいが, 対象学年によって話す内容や方法は大きく異なる。小学生以上のように話を聞いてくれる前提で指導内容を考えていると, 場合によって幼児はだんだんと聞かなくなってしまうこともある。そのため, 幼児の実態をある程度分かったうえで, 内容や方法を考える方が伝えたいことが伝わりやすい。発表する前に, 幼児の実態を見る, 担任の先生と内容や方法, 発表時間を相談する, 教材や内容を考える, 実施する, 反省するという流れを引き続き行って欲しい。</li> </ul>

重要な基本的生活習慣である<sup>8) 9)</sup>。これらの内容は, 入園後から園生活の様々な場面で, 獲得するための指導がさまざまな形で行われている<sup>10)</sup>。そのため学生が指導で行った言動が幼児に見られたことで, 幼児の意

識や行動の変化があったり習得できたりしたと判断することは難しい。この変化自体は好ましいが, 幼児がどこまで指導内容を理解しているか, 行動が定着しているかについては, 評価の観点が必要となる。さらに



学生の指導も含め、園において継続的な指導が行われることにより、幼児の生活習慣の定着が期待される。

【幼児の興味をひく教具の使用による効果】では、視覚的教具によるわかりやすい教具を使うことの有効性や、事後に幼稚園で教具を掲示することによる継続指導の必要性が示された。【指導内容の家庭における共有】では、事後に家庭で指導内容が話題となっていることが示され、幼児の興味関心をひくことのできた指導であったことが示唆された。

学生たちの指導に関する要望や意見については表4に示すとおり、【幼児期からの学びや発達の連続性の理解の必要性】【幼稚園での指導機会の重要性】【事前から事後における学習の必要性】となった。

【発達の連続性の理解の必要性】では、学生は幼児に触れる機会がほとんどないままで、児童期以降の子どもたちに関わることが課題となった。養護教諭は、様々な子どもたちを護り育てる役割が増している<sup>11)</sup>。そのため、養護教諭志望の学生として、幼稚園という場で幼児の学びや発達の様子を経験することは、子ども理解を促すうえで必要であることが示された。

【幼稚園での指導機会の重要性】では、学生の指導経験が増えることの重要性が示された。また【事前から事後における学習の必要性】では、当日指導の時間だけでなく、事前に幼児の様子を見学学習すること、準備を入念に行うこと、実施後の学生へのフィードバックや評価の観点についての必要性が示された。

そのほか、園の教員にとっても、学生の保健教育の実践によって、教員自身が保健教育を継続的・日常的に行うことの大切さを改めて認識したり、指導に役立たせたりすることができたとの記述があり、園の教員にとっての指導の視座も示された。

#### 4. 課題

幼稚園での保健教育を行ううえでの、課題を述べる。

一つは、幼稚園に出かける時間の確保である。学生たちは、1週間の時間割のなかで1日もしくは半日というまとまった自由時間がない。そのため、4月に学生の時間割が決まった時点で教員と各園舎とで苦慮しながら日程調整を行っている。大学のカリキュラム構成や時間割編成上、致し方ない状況にあるが、貴重な保健教育の実施を2園舎で行うためには、まとまった時間の捻出が課題である。また、学生の空き時間を使っての指導案の作成、練習が保健教育の質に大きく影響するため重要である一方、学生、指導教員共に負担が大きくなる。

授業実践の評価についても課題がある。現在は、学生の指導案ならびに事前事後のレポートによる評価を行っているが、今後、ルーブリックを用いた評価の観点の明確化、学生自身の自己評価と他者評価、プロセス評価とアウトカム評価等を総合した評価を行う必要がある。

さらに今後学生に対して、子どもの成長発達の理解を促すためには、幼児から高校生まで発達段階を追って実習経験を積むことができるカリキュラム構成が望ましい。しかし現実にはカリキュラムを変えることは難しく、大学と附属学校園との連携協力のもと、限られた時間のなかで多くの実習ができるよう工夫することが必要となる。

#### 5. 結論

養護教諭養成教育の2年次に早期体験学習として保健教育の実践を行うことにより、学生は、子どもの発達段階への理解や、保健教育への意欲、具体的なイメージづくりが喚起できることが示唆された。

大学と附属校園との連携が求められるなか、毎年、学生の早期体験学習として幼稚園において保健教育が実施できている背景には、2園舎の管理職ならびに教諭、養護教諭の絶大なる協力と支援がある。学生たちは2つの園舎で指導を行うことにより、より多くの幼児に接し、指導することが可能となっている。今後、養護教育講座と幼稚園との更なる連携と協力のもと、保健教育を継続発展させていきたい。

#### 付記

本研究は、2019年～2021年度科学研究費基盤研究(C)(一般)「幼児教育におけるソーシャルキャピタルを核とした健康発達資産の醸成に関する研究」(課題番号19K02595代表 三森寧子)の一環として、今までの実践をまとめたものである。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省, 1997. 教育職員養成審議会答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方法について」
- 2) 文部科学省, 1995. 我が国の文教施策 第II部第4章第3節 医学教育などの改善・充実と医療技術者の養成  
[https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpad199501/index.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199501/index.html) (アクセス日 2021年5月21日)
- 3) 藤代知美, 小林淳子, 渡部光恵: 看護学教育における早期

- 体験実習での学習内容に関する文献レビュー, 四国大学紀要 (A) 46, 183-189, 2016
- 4) 浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子 他: 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, *The KITAKANTO Medical Journal* 57, 17-27, 2007
- 5) 二宮早苗, 若村智子, 黒木裕士 他: 高度医療専門職養成を目指した人間健康科学科における早期体験実習の取り組み, 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要健康科学 13, 10-16, 2018
- 6) 永田実沙, 上田昌宏, 串畑太郎 他: 早期臨床体験の教育効果に関するシステムティック・レビューと日本の薬学教育研究の現状, *薬学教育* 4, 1-6, 2020
- 7) 江頭説子: 早期体験学習と行動科学, *杏林医会誌* 52, 25-28, 2021
- 8) 倉持清美: 第2章 子どもの育ちと領域「健康」, 新訂事例で学ぶ保育内容 領域健康 (無藤隆 編), 9~40, 萌文書林, 東京, 2018
- 9) 中野貴博: 第3章 幼児の生活習慣と健康, 保健内容 健康 第2版 (松田繁樹, 中野貴博 編), 47-65, みらい, 2018
- 10) 倉持清美, 西坂小百合: 第5章 園生活と生活習慣, 新訂事例で学ぶ保育内容 領域健康 (無藤隆 編), 148~184, 萌文書林, 東京, 2018
- 11) 文部科学省: 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援-養護教諭の役割を中心として, 2017 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/1384974.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/1384974.htm) (アクセス日 2021年5月21日)